

経済産業省や東京証券取引所からの高評価を糧に「経営力」をより強固にしていきます!

～2021年10月1日より「サステナビリティ委員会」を設置～

東京証券取引所の「健康経営銘柄2021」に選定されるなど、当社の健康経営が国や公的機関から高く評価されていることは既にご報告しています。今号では次代を見据え、さらに「経営力」を強化していくために必要としているか、当社代表取締役社長 材木正己がご紹介してまいります。



健康経営で企業価値を高めていく

日東精工は昭和13年に地域の雇用創出、産業振興を目的に創立。

以来83年、創業の地 京都府綾部市より〈お客様満足度120%達成〉を目標に、モノづくりを通じて世界中のお客様の課題解決に貢献しています。私が社長就任以来、度々口にしてきたことは〈弥栄経営〉です。昨日より今日、今日より明日、少しずつでもいいけれど常に成長していくこと。そしてそのためにも、現状に満足するのではなく、常に時代を読んで、時代に即して、柔軟に誠実に対応していくことが大切だと考えています。

当社製品はファスナー（工業用ねじ）をはじめ、地盤調査機、流量計、最近では医療用の照明機器など、そのほとんどが安全・安心に直結するものです。ですから当社では「健康経営」という言葉がまだなかった時代から、仕事に誇りと責任をもち、安全・安心を担保するために、従業員やその家族のQOL（生活の質）向上に努めてまいりました。まさにモノづくりは人づくりからです。

こうした当社のDNAが、経済産業省と東京証券取引所で共同で選定する「健康経営銘柄2021」、経産省と日本健康会議が共同で実施する「健康経営優良法人2021（ホワイト500）」認定へとつながっています。これらの認定については、評価サマリーが、本年5月、6月に新たに発表され、当社は全業種のなかで総合評価が上位10%以内に評

価されました。これも既述した〈弥栄経営〉、つまり、結果が得られたからといってそこにとどまるのではなく、より発展させていくことの証、といえるでしょうか。

当社の健康経営への取り組みは外部から評価されるためのものではありませんが、国や公的機関からの、こういったお墨付きは、当社の価値向上につながっていることはいまでもありません。

次代を見据えて サステナビリティ委員会を設置

今、企業には自社利益を追究することだけでなく、地域貢献や環境配慮など幅広い視座をもつことが求められています。SDGsは「持続可能な開発目標」と訳されることが多いですが、シンプルに言えば、心にも身体にもやさしい暮らし、自分本位でなく他者も含めて、理想的な快適な暮らしを求め、そしてそれを次の世代、さらに次の世代へとつなげていくことです。このSDGsへの取り組みは健康経営強化のみならず、企業評価、ブランド評価へとつながっていきます。多様性、ジェンダー、気候変動、カーボンニュートラル……企業がこうしたことへの舵取りを少しでも間違えると、致命傷になりかねません。

当社では2020年からは日東精工グループにおけるマテリアリティ（重要課題）並びに価値創造モデルの基本概念を確立し、持続可能（サステナ

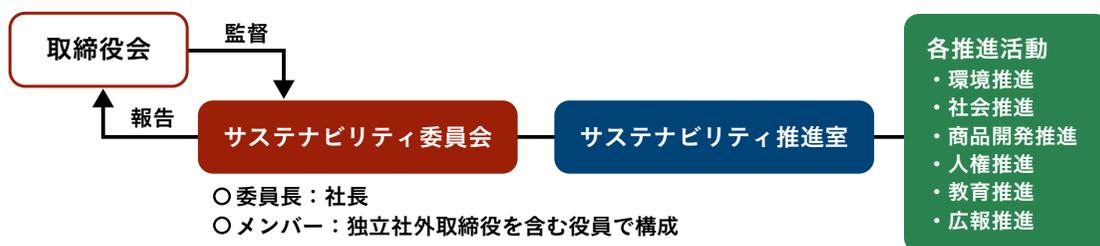
ブル) な社会の実現に向けた取り組みを進めてまいりました。今般、10月1日から、この取り組みをさらに強化するために「サステナビリティ委員会」を設置することといたしました。

これまで個別に行ってきた活動を関連部署や各委員会と連携し、^は流行り^やすたりの表面的なことではとらえるのではなく、社会が本当に何を求めているのか、お客様や一般消費者にとっていかに貢献

できるかなど、その具体的な目標設定と戦略を立案・発信し、また実行・評価するための新たな体制を構築してまいります。

当社第116期第2四半期の決算報告ではおかげさまで増収増益となりました。こういうときだからこそ、次代を見据えた、新たな価値創造の施策を打ってまいります。

■サステナビリティ経営推進体制



サステナビリティ委員会は、取締役会による監督のもと、代表取締役社長を委員長とし、サステナビリティに関わる取り組みの意思決定機関として、関連する方針の決定や目標の進捗管理・施策の審議等の機能を担います。その傘下にサステナビリティ推進室を置き、これまで個別に行ってきた活動に横串を通し関連部署や各委員会と連携して、環境、社会、商品開発、人権、教育、広報を企業活動へ展開していきます

日東精工グループ紹介 ————— PT. NITTO ALAM INDONESIA (NAI) / インドネシア

「ONE TEAM」でがんばっています！

インドネシアは発展途上ゆえ、過去には通貨危機や人件費の高騰、為替の乱高下など政治や経済のうねりを受けてきました。しかし世界4位の人口、若い平均年齢、旺盛な購買欲など、ビジネスに魅力的なパワーに満ち溢れています。NAIは1985年設立。日東精工グループで2番目に古い海外拠点であり、同時期に日本から進出してきた企業と長きにわたり強い絆、深い信頼関係を築いています。「一貫生産体制をもつ工場」を2つ有しており、タンゲラン工場（第一工場）では主に家電、弱電、OA機器関係の一般ねじを製造。新しいブカシ工場（第二工場）では主に四輪、二輪向け一般ねじおよび特殊冷間圧造部品を製造しています。日東精工の海外工場の中では唯一、太物、パーツホーム品などの特殊冷間圧造部品を幅広く製造。とくに今後の伸張が期待されています。

「今年の4月に社長に就任しました。2012年から3年間駐在していましたので2度目のインドネシアです。ご承知

のようにコロナの感染拡大が日本以上に厳しいですが、対策をしっかりとっており、当社からクラスターは発生していません。状況もだんだんよくなっていくでしょう。日々の「カイゼン」活動の積み重ねで経営基盤をより強固にし、未来のための種まきが私のミッションだと思っています。従業員のモチベーションを上げていくことも大事。心を一つにするために工場のスローガンを一新し「ONE HEART! ONE TEAM! ONE FAMILY!」としましたが、インドネシアの人は陽気な人が多いのでオリジナルの振りをつけ、身体を動かしながら毎週スローガンを唱えています」（上原規NAI社長）。



スローガン(右)と朝礼で振りをつけてスローガンを唱和するNAI従業員

ねじ締めユニット「PD400UR」新発売 バーチャル展示会にも出展

ユニバーサルロボット社の「UR+」製品認証を取得した、ねじ締めユニット「PD400UR」シリーズを8月30日に新発売。また7月26日から8月31日まで、バーチャル展示会「THE COBOT EXPO JAPAN 2021 SUMMER」が開催され、ここでも「PD400UR」をご紹介。7月30日には同展示会の「ライブウェビナー」にて、〈さまざまなねじを、さまざまな位置で高精度に締め付け！〉という題目で新製品の魅力を解説しました。



ユニバーサルロボット社が製造販売するURロボットとプラグ&プレイで使える周辺機器のプラットフォームが「UR+」です。今回、産機事業部のねじ締めユニットが日系企業でははじめて、そのラインナップに加わることになりました。今後「PD400UR」を通して〈協働ロボット〉分野への販路拡充を目指してまいります



ねじ締めユニット「PD400UR」の製品説明動画はこちら

「日東精工ビジネススクール」を開催しました

今般、新しい試みとして「日東精工ビジネススクール」を開催しました。40歳以下の中堅・若手社員がマネジメントの基本理論を学ぶことで、思考力、変化対応力を磨き、将来の日東精工グループを牽引する人財としての見識を身につけていくこと、つまりは次世代若手経営者育成を目的としたものです。

福知山公立大学 地域経営学科の加藤好雄准教授を講師に6月12日から8月7日まで隔週土曜日の午前中に開催。全6回、オンラインでの実施でしたので、日東精工本社だけでなく全国各地のグループ企業からの聴講も可能となり、マネジメント研修だけでなく、グループワークを通して有意義な人事交流の場ともなりました。

今回のビジネススクールのテキストとして使用した『MBAエッセンシャルズ』(内田学著 東洋経済新報社)



ねじ大好き!

コラム

たくさんの方にねじの写真 ねじの絵をお送りいただきました

このニュースレターでも募集告知をしましたが、当社ファスナー事業創業65年を記念して『撮ってみよう! ねじの写真、描いてみよう! ねじの絵ハガキ』キャンペーンを実施しました。家庭や職場でねじを話題に会話を広げ、ねじの魅力、ねじの大切さを再認識してもらいたいという願いをこめたもので、おかげさまで全国のたくさんの方からご応募をいただきました。最優秀作品のようなかっこいい作品もあれば、ねじを焼き鳥の「ねぎま」に見立てた「ねじま」などユーモアあふれる作品もあり、ユニークな視点や発想に驚き感激すると同時に、改めてねじの底力を感じています。

当社が本社を置く綾部市では、このキャンペーンがあやべ市民新聞で記事紹介され、また募集告知のフライヤー(チラシ)を綾部市図書館やあやべ特産館、観光案内所などで配布いただきました。コロナ禍で様々なイベントが中止・延期するなかでの楽しい試みと高く評価されました。「受験生応援ゆるみ止めねじプレゼントキャンペーン」をはじめ、今後も幅広い方にねじの魅力をグローバルに発信し、地域からもより愛されるよう努めてまいります。



左は当社ねじっくんのぬいぐるみがキャンペーンを告知(あやべ特産館)、右は8月11日のあやべ市民新聞で当社の事業が全面で紹介されました。キャンペーン報告として下5段スペースで応募いただいた作品の一部(29点)を掲載。表彰関連の詳細はQRコードご参照





自分で変えられることに集中する

新

新型コロナウイルス用のワクチンですが、コロナが猛威をふるってからわずか1年足らずで開発された、そのことを驚異的だと高く評価する人がいる一方で、短期間ではほんとうの成果はわからないと心配する人も少なからずいます。でもじつはもつと奥が深い話です。

カタリン・カリコといって、ほとんどの方がその名前をはじめて耳にされるかもしれませんが、ハンガリー出身の科学者で、新型コロナウイルスの発症と重症化を防ぐ「切り札」と期待されるワクチンの1つ「mRNAワクチン」に欠かせない技術を開発した女性です。モデルナやファイザーのワクチンにはこの技術が応用されています。

☆

ハンガリー出身の彼女は、大学で生化学の博士号を取得したあと、地元の研究機関で研究員として働きました。研究途中で資金援助が打ち切ら

れたことから1985年、夫と娘の3人でアメリカに渡り、ペンシルベニア大学などで遺伝物質の1つ「mRNA」の研究を行います。けれど、助成金の申請を企業に断られたり、大学で役職が降格になったりするなど、研究は評価されることはなく苦難の連続だったといえます。

2005年に今回のワクチンの開発につながる革新的な研究成果を発表したものの注目を集めることはなく、その後大学の研究室を借りる費用をまかえなくなり、2013年にドイツの企業バイオテックに移りました。今回、研究が認められ、形になるまで、じつに40年以上の苦節の時代があったわけです。コロナ用ワクチンは、じつは、とてつもなく長い時間の積み重ね、膨大なデータのうえに成り立っているのです。

☆

以前本欄で、日本人としてはじめてノーベル賞を受賞し

た湯川秀樹博士の「長い夜を泣き明かしたことがない人に人生を語る資格はない」という言葉を紹介しましたが、この言葉につながるエピソード。カリコ博士自身の言葉「不可能だと知らないから、できることがある」も、思う結果がなかなか得られない、評価されないことがあってもけっしてくじけてはいけなないと、私たちに勇気を与えてくれるでしょう。

このカリコ博士とiPS細胞でノーベル賞受賞の京都大学山中伸弥教授が、今春、NHKの『クローズアップ現

代』で対談をされていました。上述のエピソードのほかにも、自分自身に枠をはめないことの大切さ。人との出会いや、外に出かけることの重要性など、モノづくりのヒント、生きるヒントが多数ありましたので、再放送やオンデマンドなどでご覧になる機会があればと思います、おすすすめします。

カリコ博士がまだ少女だったころの憧れの先生の言葉「変えられないことに時間をとられないで、自分で変えられることに集中しなさい」も、示唆に富む言葉ですね。本稿の締めめの言葉といたします。

連載④

あやべ ちよつと寄り道

地方だからできる連携 地域紙の新たな試み!

「地域紙のある町ネットワーク」はあやべ市民新聞社が提唱して生まれた新しい試み。発行部数が少ない地域紙でも、互いに協力し合えば大きな力になります。たとえば地震や豪雨などで大きな被害が出た土地の特産について頒布会の無料広告を各紙に同時掲載することで、全国的な復興支援につながります。小さな力を連携で大きなものに変えていく取り組みであり、現在31紙の連携が生まれています。



この取り組みはNHKテレビで全国放送されました

